

「他人の目で」

— ルイーダ・ピランデッロ 『一年間の物語』より (五) —

尾 河 直 哉

Con altri occhi

Traduzione giapponese di *Novelle per un anno* di Luigi Pirandello (5)

NAOYA OGAWA

キーワード

現代イタリア文学 (letteratura italiana contemporanea) 、シチリア島 (Sicilia) 、シチリア民衆文化 (cultura popolare siciliana) 、ルイーダ・ピランデッロ (Luigi Pirandello) 、短編小説 (novella)

他人の目で^①

階上テラスの小庭園に向かって大きく開いた窓からは、さわやかな朝の真っ青な空にまるで一本そっと置かれたようなアーモンドの花咲く枝が見え、庭のまんなかにある小さな水槽のごぼごぼいうくぐもった音に混じって、遠くの教会が鳴らす明るい鐘の音と、大気

と陽の光に酔ったツバメのさえざりが聞こえていた。

アンナはため息をついて窓から離れると、いつもなら自室で寝なかつたことを使用人に悟られないようにベッドを乱してゆく夫が、その朝にかぎってそれをし忘れていることに気づいた。だれもふれていないベッドに肘を立て、上半身を支えると、美しい金髪の頭を枕に突っ伏して、いつもここで貪る眠気を、まるでさわやかなリネンのなかに味わおうとでもするかのように、目を半ば閉じた。窓の前では、ツバメの群が鋭いさえざり声を発しながら狂ったように飛び回っている。

「こっちに寝ればよかったのに」。そう独り言をつぶやくと、気怠そうにふたたび身を起こした。

夫はその日の晩に出発することになっていたので、アンナは旅支度をしてやるため夫の部屋に入ってきたのだった。

洋服筆筒を開けると、内ひきだしでなにかきするような音がし、怖くなってさっと身を引いた。部屋の隅から柄の曲がったステッキを取ってくると、裾を膝のあいだにしっかり巻き込み、ステッキの先端を持って、遠くからひきだしを開けようとする。ところがいざひきだしを引つ張ろうとしたとき、ステッキのなかから、きらきら輝く刃がするつと現れた。こんなものが出てくるなんて。アンナはぞつとして、思わず仕込み杖の鞘を開放した。

このとき突然またきしむような音が聞こえてきて振り向いた。ということとは、最初の音も、窓のまえで飛び回っているツバメのさえずりだったのだろう。

鞘を抜いた武器を足で遠くに押しやると、扉を開けた筆筒から、夫の古着を詰め込んだひきだしを外に引つ張り出した。そしてふと湧いた好奇心に促されてひきだしをすみからすみまで調べ始めたが、くたびれて色落ちした上着をもとに戻そうとしたそのとき、裏地の折り返しの内側に小さな紙のような感触があった。破れた内ポケットから落ちたらしい。何年前かわからないけど、こんなところに落ちたまま忘れられた紙っていったいなんだろう。アンナは知りたくなった。こうして偶然、アンナは夫の前妻の肖像写真を発見したのである。

視界が混濁し心臓が止まりそうになったアンナは、顔面蒼白で窓辺に駆け寄った。そして、そこに茫然と佇んだまま、恐怖心に近いものさへ覚えながら、知らない女性の肖像をいつまでも眺めた。

ポリウレームのある髪型と時代遅れの服のため、アンナには初め女性の顔の美しさがわからなかった。しかし、写真の当時から何年も経っているためぶかっこうに見える服装から目鼻立ちだけを切り離し、とりわけ目に意識を集中できるようにすると、腹立ちとともに憎しみが心の底から湧き上がって一気に頭上まで駆け上った。遅まきな嫉妬からくる憎しみだった。最初の家庭を突然崩壊させた夫婦の悲劇から十一年が経っていたが、そこには、いまや自分の夫と

なった男に惚れていた女にたいする軽蔑が入り交じっている。

アンナはこれまでわけもわからずこの女を憎んできた。まず、今自分自身が敬愛しているこの男をあの女はなぜ裏切ることができたかがわからなかった。次に、不実な妻の汚名とすさまじい死の責任はブリーヴィオの方にあるとでもいわんばかりに、両親が彼の結婚に反対した理由もわからなかった。

この人なのね。この女だわ。間違いない！ ヴィットーレの最初の妻で、あの自殺した女は！

写真が誰に捧げられたものか、裏にはその証拠が書き込まれていた。「わたしのヴィットーレへ、あなたのアルミーラ——一八七三年十一月十一日」

アンナは女の死について漠然としたことしか知らなかった。裏切りを知ると、夫が裁判官のような冷淡さで妻を自殺へ追い込んだこと。知っているのはそれだけである。

夫の放った刑の宣告が記憶に戻ってきて、アンナは溜飲を下げた。献辞に書かれた「わたしの」と「あなたの」が、女とヴィットーレを結ぶ絆の強さをあてつけがましく誇示しているようで苛々していたのである。

いまや自分だけにしか向けられていない敵意が原因で最初のうちは憎悪がちらちらと燃えていたが、その炎がおさまると、アンナの心のうちには女の好奇心がむくむくと湧いてきて、この顔の目鼻立ちをもっとよく見てみたいと思った。だが、その好奇心も、悲劇的な死に方をした人にかつて属してた物を見るときに感じるあの妙な悲しみに半ば抑え込まれてしまった。その悲しみはいまやますます強くなっていったが、アンナが決して知らない類のものではなかった。かつては他の女性のものだった夫にたいする自分自身の愛もまた、その悲しみに染め上げられていたからである。

女の顔をまじまじと見て、自分の顔といかに違うかアンナはすぐに気づいた。と同時に、胸のうちに疑問が兆してきた。この若い娘

さん、たしかにこの人なりに美しいけど、こんな娘さんを愛していた夫が、どうしてわたしみたいに違う女を好きになれたのかしら？

写真だとずいぶん陰気にみえるけど、この人、ほんとうは美人みたい、あたしよりずっと。それにこれ。あの人とキスするのに唇を閉じてるわ。でもなぜ、口元がこんなに悲しそうにゆがんでいるの？ それにこの強い眼差し、こんなに悲しそうなのはどうして？ 顔全体に深い悲しみが漂っていた。アンナはこの目鼻立ちからうかがえる控えめで紛れもない善良さになかばいらだつたが、つづいて、体のなかからとぜん反感と嫌悪が込み上げてきた。女の眼差しにふと、自分自身の目と同じ表情を認めた気がしたからである。朝、夫のことを思いながら鏡のまえで身繕いをしているときに見る自分自身の目と同じ表情を。

写真をポケットに隠すか隠さないうちに、夫が部屋の戸口に姿を現した。鼻息が荒い。

「なにしてんの？ 例によってあれかい？ 整理しちゃったの？ まいるよなあ！ なにがどこに行つたかちつともわからないじゃない！」

鞆を外した仕込み杖が床に転がっているのを見て言う。

「ああ、服といっしょにサーベルまで筆筒から引つ張り出しちゃったの？」

そして、だれかにくすぐられでもしたようにクククと喉で笑った。笑いながら妻の方を見て、おれはなんでそんなに可笑しいんだ、教えてくれ、といわんばかりの顔。妻の顔をのぞき込みながら、鋭く落ち着きのない黒い小さな目をしきりにしばたかせている。

ヴィットーレ・ブリーヴィオは妻を一本気で純な幼い愛し方し方できない子どものように扱ひ、その愛に包まれていると感じるときには、うんざりすることが多かった。妻の愛情にはたまにしか関心を示さず、そのときでさえ、いたわりの調子を軽い皮肉が彩っている。

て、まるでこう言いたげだった。「よしよし、わかった！ ぼくも君といっしょにお子さまになってあげる。こういうことだって必要だ。でもあまり時間を取らせなくてくれ！」

アンナは写真を見つけた古い上着を足許に落とした。ヴィットーレは仕込み杖の刃先で上着を刺して取り上げ、庭に面した窓から、若い使用人を呼んだ。使用人は御者としても働いていて、ちょうど馬を荷車につないでいるところだった。若者が庭師のシャツを袖にかけて窓のまえに現れるやいなや、刃先に突き刺した上着を乱暴に顔へ投げつけ、「ほら、取っとけ！」と施しの言葉を放つ。

「これでブラシをかけたたり、片づけたりするものが減るだろう」、と夫は妻の方に向き直って言い足した。

そしてふたたび例の作り笑いをしてみせ、まぶたをしきりにしばたかせた。

夫が町から出て遠くへ行くことも、数日という短い不在にとどまらないこともいくどかあったし、今回のように夜に発つのも初めてではなかった。しかし、例の写真を発見したショックから抜け出せずにいたアンナは、ひとりになるのが妙に恐ろしく、泣きながら夫にそのことを訴えた。

ヴィットーレ・ブリーヴィオは、時間に遅れるのが心配で慌てていたし、自分のことで頭がいっぱいだったので、いつになく泣く妻に無愛想な対応しかしなかった。

「なんだい！ どうしたっていうんだい？ ほらほら、子どもみたいなだだはこねない！」

そして腹を立てたまま出発してしまった。妻への挨拶さえなかった。

アンナは夫が勢いよくボタンと閉じるドアの音にぎくつくとした。灯りを手にしたまましばらく玄関に佇んだ。両目にたまった涙が凍えそうだ。それから我に返り、すぐベッドに入ろうと急いで自室に

もどった。

すでにベッドが用意された寝室では常夜灯がともっていた。

「もう寝てちょうだい」。アンナは部屋で待つていた家政婦に言った。「あととはひとりだけでやるから。おやすみなさい」。

灯りを消したが、いつものように暖炉の張り出しには置かず、ナイトテーブルのうえに置く。あとで——自らの意志に反して——必要になるような予感がしたからだだった。目の前の床をじっと見据えながら、急いで着がえはじめる。ワンピースが足許に落ちたとき、例の写真の存在に思い至り、あんなに怖い思いをさせられたあの悲しく陰気な目に自分が見つめられ、同情されているように感じて、激しい苛立ちを覚えた。腰をかがめてカーペットに落ちた服を決然とつかむと、折り畳みもせず、ベッドの足許にあるソファに置いた。写真を隠したポケットと丸まった服が、あの死んだ女のイメージを抑え込み、二度と浮かび上がらないようにしてくれるかもしれない、いや、そうしてくれるに違いない。まるでそう思っているようだった。

ベッドに横になるとすぐに目を閉じて意識を凝らし、駅へと向かう夫の姿を頭のなかで追った。夫を観察し、理解しようとその日一日緊張していたことにはたいする恨みのこもった反抗心からだだった。この気持ちごとくからやってくるのか自分自身にもわかっていて、それを追い出したかったのである。

意識を凝らしたために神経が高ぶって、驚くほどくつきりとした映像が脳裏に浮かんできた。ひとけない夜の長い道を照らす街灯が、震える灯りを石畳に反射させ、まるで動悸でも打っているようだ。どの街灯の足許にも丸い影。店はどこもかしこも閉まっている。ヴィットーレの運転する馬車がそこにやってくる。路地に身を隠して待ち伏せするように、アンナは駅まで夫の馬車を追いかけた。大きなガラス屋根の下には列車の陰気な姿が見える。煙でくすぶり、くぐもった音が響く薄暗いその構内は、大勢の人でこもった返

していた。ああ、列車が発発する。次第に遠ざかり闇に消えてゆく列車をまるでほんとうに見ているような気持ちになったところで、アンナはふとわれに返り、しんと静まりかえった部屋のなかで目を開けた。そして空虚感にいたたまれぬ不安を感じた。なにかが足りないような気持ちだった。

そのときだった。アンナはあることに気づいて愕然とし、うろたえた。おそらくこの三年間、実家を出てこのかた、自分はずっとこの空虚のなかにいたのだ。いまやとそれに気づきはじめてにすぎない。これまで気づかなかつたのは、この空虚を自分自身で、自分の愛情で埋めてきたからだ。いまになってやっとそのことに気づきはじめた。この日一日中、観察して判断を下すために、その愛情を棚上げにしたからだだった。

「行つてきますさえ言つてくれなかつた！」そう思った。そしてまた泣きはじめた。そう思ったこと自体が涙の決定的な原因であるかのように。

起きあがってベッドに腰掛けたが、立ち上がってハンカチを取ろうと伸ばしかけたところで手をふと止めた。そうよ、こうなつたら、あの写真をもういちどじっくり見たってかまわないじゃない。アンナは写真を取ると、灯りを点けなおした。

女のいかに違つて見えたことか！ こうしてありのままの肖像をじっくり眺めていると、頭のなかで勝手なイメージをつくりあげ、勝手に感情を抱いていたことに後ろめたさを感じた。どちらかとうと太って血色の良い女を想像していた。目もきらきらと嬉しそうに輝いて、笑つたり、俗っぽい楽しみに耽つたりするのが好きなタイプだと。ところが、こうして見てみると、まだ若い娘で、純粋な顔立ちからは悲しみに満ちた深い精神性が立ち上っている。たしかにアンナとはちがっていた。しかしそれは、最初思っていたように俗っぽいからではなかつた。それどころか、この唇はいちども笑つたことがないらしい。アンナの唇はいくども陽気に笑つてきたとい

うのに。そしてこの顔が暗く見るとすれば（写真からはそう見える）、それは、金髪で血色の良い自分の顔にくらべて与える印象が明るくないせいだった。

なぜ、どうしてこんなに悲しそうなのかしら？

あるいはやな考えが浮かんできて、女の写真からすぐに目を逸らした。自らの心の平安と、その日一箇所ならず傷を負ったとはいえまだ健康な夫への愛情ばかりでなく、夫にたいする敵愾心をいささかなりとも自らに許したことの貞潔な女が抱く誇りにたいしても、畏が仕掛けられていることに突然気づいたのである。この女に愛人がいたなんて！そして、女がこんなに悲しいのはたぶん不倫の愛ゆえであつて、夫にたいする愛ゆえではないのだ！

写真をナイトテーブルの上に放り出すと、ふたたび灯を消し、今度こそ眠りに就こうと思つた。あの女のことを考えるのはもう止そう。あの人とわたしの間にはなんの共通点もないんだから。ところが、まぶたを閉じると、死んだ女の眼差しがたちまち浮かんできて、脳裏から追い出したくとも追い出せない。

「夫のためじゃない、夫のためじゃない！」まるで女の呪縛から逃れたくて悪口雑言を投げつけるように、いらいらしながらいくどもそうつぶやいた。

そして、女の目の眼差しと悲しみがこちらに向かつてこないように、あのもうひとりの男、つまり女の愛人だった男にかんして知っているかぎりのことを思い出してみようと努めたが、遠い昔の愛人について知っていたのは、アルトゥーロ・ヴァッリという名前くらいだった。この男が、わが身の潔白を証明しようとするかのようになり、事件の数年後に結婚したことはアンナも知っていた。ヴァッリはブリーヴィオに罪をなすりつけようとしていて、相手からの決闘の申し入れを断固としてはねのけ、狂った人殺しは相手にしないと公言してはばからなかった。こうして決闘を拒絶されたあと、ヴィットーレはどこで出会つても、そこが教会のなかであるうと、

ぶつ殺してやるとヴァッリを脅した。そこで、ヴァッリは妻とともにいったん故郷を出て、再婚したヴィットーレが村を出て行くときに帰郷したのであつた。

しかし、今日ふたたびアンナが思い出したあの出来事の悲しみから、ヴァッリの卑劣さから、そしてあれから何年も経って、なにこともなかったように暮らしを再開して再婚した夫の忘却から、今度は自分がその男の妻になれた喜びから、別の女のことなんかみじんも考えずに過ごしてきたこの三年から、思いもかけずにこの女に同情すべき理由が現れてきてうむを言わずアンナのうえにのしかかつてきたのである。女のイメージは鮮明によりみがえってきたが、それはとてもとても遠くから眺めているような気持ちだった。そして女が、苦しみに満ちたあの鋭い目で、軽く頭を揺らしながらこう言っているように思えた。

「でも死んだのはあたしだけなのよ！ あんたたちはみんな生きてるじゃない！」

ひとり、家のなかで見たり感じたりしていた。怖かった。たしかに死んではない。でも、結婚式の日から三年間、アンナはいちどとして両親に、姉に会つていなかった。家族を敬愛し、いつも家族の言うことにしがたい、信頼を寄せてきたアンナが、その家族の意志に抗い、あんな男はよせという忠告を無視したのである。あの男のために死ぬほどの病気になる。医者が結婚を許してやるよう父親を説得していなければ、ほんとうに死んでいたかもしれない。父親は不承不承膝を屈したものの、あの結婚式のと、おまえにとつてはもはや父親も実家もないものと思えと言ひ渡した。夫との年齢差は十八あつたが、その年齢差を別にすれば、父親にとつて最大の障害は夫の経済事情だった。リスクの高い事業を手がけていて、自信と運に任せていつも無謀な賭けにでるため、激しい浮沈が避けられなかったからである。

結婚して三年このかた安楽な気分には包まれて暮らしてきたアンナにしてみれば、夫の財産にかなするかぎり、父親の慎重さなど敵意に満ちた偏見にすぎず、改めて考えてみるまでのことには思えなかった。もつとも、事情に疎いアンナは、夫の信じることを鵜呑みにしていたにすぎないが。年齢差に堪していえば、元気で引き締まった体においても、休みなくきびきびと動き疲れを知らない精神においても、ブリーヴィオは数年前からいささかも消耗を感じていなかった。今までのところ、これと違ってアンナが失望するよ

うな問題も他人があつと驚くような出来事もなかった。この死んだ女の目を通して自らの人生を眺めてみることで、夫にたいして初めて見つかった不満の種（自分でもそんなものが見つかるとは思つてもみなかったが）はまったく別のところにあつた。たしかに、夫に軽くあしらわれ、顧みてもらえなくて傷ついたことはこれまでもあつた。しかし、この日はいつもと違つていた。両親から切り離されて、孤独にいたたまれぬ不安をおぼえ、自分ももう両親に見捨てられたんじゃないかと感じたが、不安があまりに強かつたため、ブリーヴィオと結婚しただけですであの死んだ女となにか同じものを持つていような、伴侶としての価値がないよ

うな気持ちになつていたのである。そして慰めてくれるべき当の夫にしてからが、いくらこちらが娘や妹のような愛で尽くしてもその犠牲に比べようとする意欲をみせず、アンナにはなんの価値もない、自分が犠牲を払つてもらうのは当然だ、だからアンナの労に報いる義務はいささかもない、とでもいわんばかりだった。たしかにそれも仕方がないところはある。でもそれは当時アンナが相手にどうしようもなく惚れていたからだ。でも今度は夫の方がアンナの犠牲に報いるべきではないか。それなのに：

「いつだってこうなのよ！」死んだ女の唇から、そんな悲痛なため息が聞こえてくるような気がした。

表情に惹きつけられた。じゃあ、このひとも、ほんとうは夫のために苦しんだのかしら？ このひとも、このひとも、愛されていないことに気づいて、こんな空虚感に苛まれていたの？

「そうなの？ ねえ、そうなの？」涙にむせびながら、アンナは写真に問いかけた。

すると、今度はこの善良そうな目、情熱に燃えた目の方がアンナに同情し始めるのだつた。こうして放っておかれ、犠牲に報いられることのないアンナ。宝石を宝石箱にしまい込むように愛を胸の奥にしまい込み、箱を開ける鍵は持つていても、けつして使おうとしない吝嗇家のようなアンナに。

(1) 初出は一九一一年七月八日付『コッリエーレ・デッラ・セーラ』紙。

底本には *Con altri occhi* in Luigi Pirandello, *Novelle per un anno*, a cura di Mario Costanzo. Introduzione di Giovanni Mechia, volume primo, tomo I, Arnoldo Mondadori, Editore S.p.A. V edizione I Meridiani febbraio 1996 を使用した。